

2024年2月15日(木) ハコラク3月号 掲載

ドクターコラム『人工関節置換術の近況』

整形外科 宮崎 拓自 人工関節センター長

整形外科

人工関節置換術の近況



函館中央病院

整形外科 人工関節センター

宮崎 拓自 センター長

略歴

平成20年、秋田大学医学部を卒業後、北海道大学病院整形外科に入局。北海道大学病院、帯広厚生病院、市立釧路総合病院、製鉄記念室蘭病院、苫小牧王子総合病院、小樽市立病院勤務などを経て、令和5年、函館中央病院整形外科に着任、同時に人工関節センター長就任。日本整形外科学会整形外科専門医。医学博士。

私は股関節、膝、足関節を担当しておりますが、今回はその中でも多くを占める手術である人工関節についてお話させていただきます。

人工関節の適応となる病気には、変形性関節症、関節リウマチ、外傷などがあります。変形性股関節症についてお話すると、日本人は生まれつき股関節の屋根になる部分のかぶり浅い方が多く、そのような方は体重を受けると面積が狭いため、年齢を重ねるとともに徐々に軟骨がすり減り、変形性股関節症を発症します。膝関節については、膝の内側（まれに外側）の軟骨が少しずつすり減り、変形性膝関節症を発症します。一度無くなった関節軟骨が再

生することはなく、根本的な治療は現時点ではありません。

人工関節は、その傷んだ関節面を切除し、人工のインプラントに置換することで疼痛を軽減する手術です。医療の発展による安全性の向上により、ご高齢であっても、手術前検査に大きな問題がなければ、人工関節手術を積極的に行う時代となっております。インプラントの性能の向上も目覚ましく、人工関節の耐久性もひと昔前は15年程度でしたが、近年のインプラントはより長期の耐久年数が期待されております。よって比較的若い方でも人工関節手術を施行するケースが増加してきました。

私が人工関節の適応について考える

際に最も重要と考えている要素の一つは、関節の痛みでどれくらい日常生活が制限されているかです。例えば、近所に買い物に行くことが大変になってきた、今まで杖無しで歩けたのに、杖無しでは歩けなくなってしまうなどです。

今までできていたことが、痛みのためになくなってしまっている方は多くいらっしゃると思いますが、人工関節によってご自身の生活を取り戻せる可能性があります。日本人の方は我慢強い方が多く、なかなか病院を受診されない傾向にあります。歳のせいと諦めず、一度、病院を受診してみたいかがでしょうか。